

専門性向上研修 初年度の成果と課題

教職研修センター 専門研修課

玉本 響子 葉師 千春 塩谷 美穂 高野 和樹

私たち専門研修課は、教員が自らの課題や関心に応じて学びを選択できる希望研修を運営する。学校現場に寄り添いつつ、新たな教師の学びをどのように支えていくか。現場教員が受けたくなる、また受けてよかったと思える、学びある研修とはどのようなものか。試行錯誤する中で見えてきた課題が、「教科別研修」という限られた枠の中では、現場が研修を選択する際に幅が限られること、また体系的に学びたい研修を選びにくいことであった。この課題意識のもと、本研究所が実施している研修を体系化し、発展させた「専門性向上研修」をスタートさせた。本稿では、この新しい試みについて報告する。

<キーワード> 専門性向上研修 研修の体系化 外部機関との連携 学習全般

I はじめに

昨年度、中学校音楽、高等学校芸術科音楽の研修講座にて、国語科、社会科、英語科との連携を意識した教科横断型の研修を実施した。教科横断型の学びは、複数の教科の視点を組み合わせることで、学習者の思考の深まりや探究的な学びを促す。そのため、研修でも教科の枠を越えた視点を共有し、各教科の専門性を生かしながら協働的に授業改善を進めることを目指した。しかし、「教科横断型」「どなたでも一緒に学びましょう」とチラシに記載しても、音楽科以外の教科の教員の申し込みは7名（国語4名、社会4名、英語1名）と少なかった。そのため今年度は、教科を越えた教員の学びをサポートするために「学習全般」という枠を新設した。学習全般は、教科を越えた学びや探究的なテーマを中心に、専門研修課が企画運営していく。

II 今年度の取組み

1 研修の体系化

令和6年度までは、各センターや各課それぞれが研修を実施しており、受講を検討する教員にとっては本研究所がどのような研修を開催しているのかが見えにくく、選びづらいという課題があった。そこで、今年度からはこれまで専門研修課が実施してきた教科別研修を改め、三つのカテゴリーに整理し、専門性向上研修とした。

「学習に関する研修」には、各教科の幅広い学びや教科横断的な学びを充実させるために、教科別の研修に加えて「学習全般」を設けた。これは、子どもたちに教科の枠を超えた学びが求められているのと同様に、教員にも教科の枠を超えた学びが必要であると思われ、教員が専門教科以外のことを学びたいと希望した時に、選択できるコンテンツがあるとよいと考えたからである。また、令和5年度の研修後の振り返りで「学びたいこと・困っていること」として最も多かったICT分野のニーズに応えるため、今までICT教育サポートセンターが独自で行っていたICT活用の研修を新たに専門性向上研修に加えた。さらに、これまで2年目研修として限定的に実施されていた「主体的・対話的で深い学びの指導と評価」を「学習全般」に取り入れ、すべての教員が受講できるようにした。加えて、カーボンニュートラルに関する研修「環境×探究」を新設し、持続可能な社会づくりに向けた学びを深める機会を提供した。

「生徒支援に関する研修」においては、教育相談センターが訪問型研修として実施していた「福井県版ポジティブ研修」を専門性向上研修とし、「発達支持的生徒指導」として位置づけた。また、学校現場での課題解決を支援する「チーム学校で取り組む教育相談に関する研修」を「課題対応の生徒指導」として実施することとした。

「学校運営に関する研修」では、職務別選択研修として実施してきた「アラカルト研修」を専門性向上研修として位置づけ、さらに各校の校内研修の学びをつなぐ「校内研修活性化」を加えた。

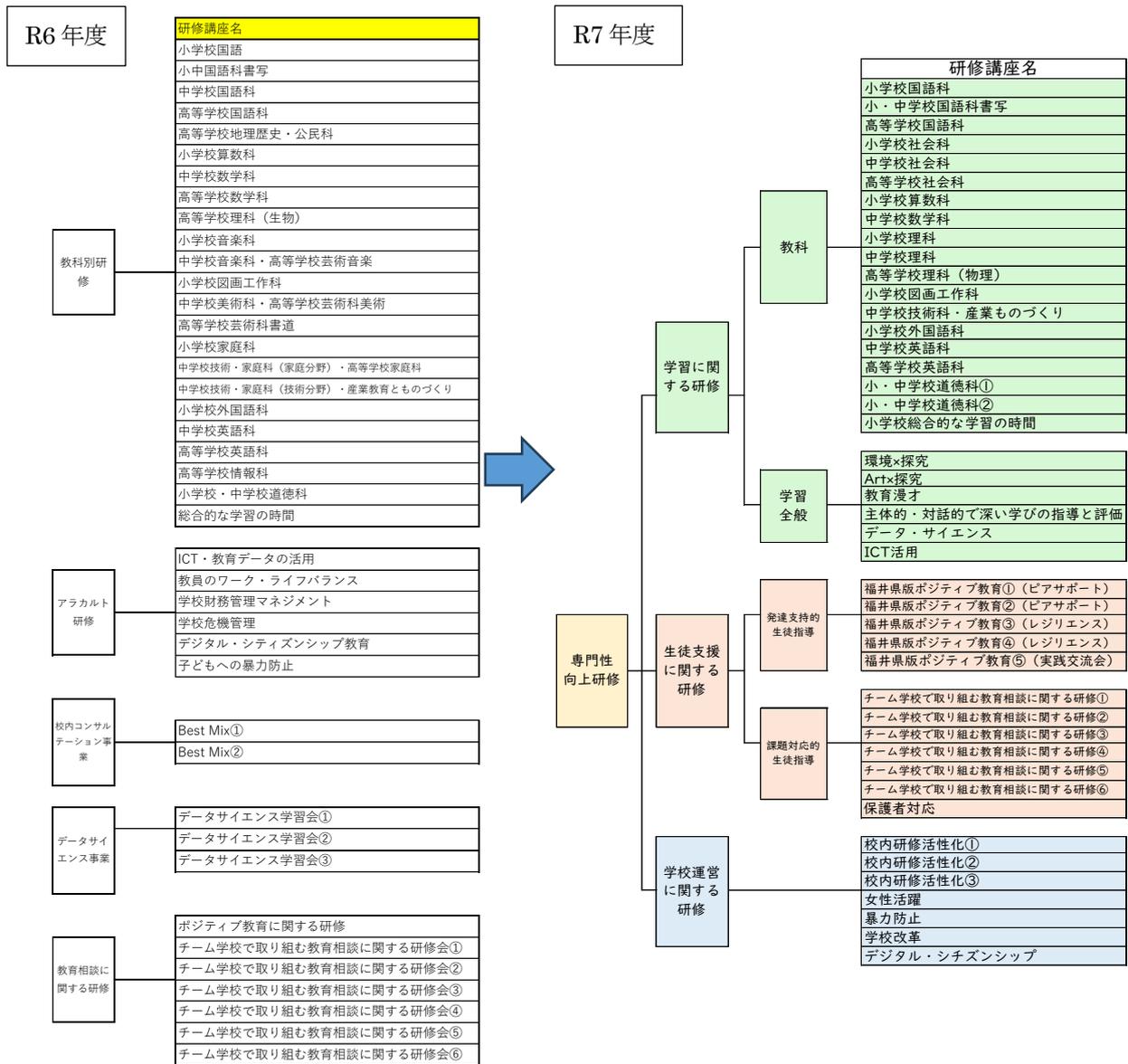


図1 令和6年度と令和7年度の研修体系比較

2 学習全般

(1) 研修講座「環境×探究」

今年度の専門性向上研修においては、福井県環境政策課との共催により、「環境×探究」と題した対面型研修を実施した。この研修は、福井県が推進するカーボンニュートラルの取組みを、教員にこそ知ってほしいという目的で、令和9年度まで実施される。

本研修では、カーボンニュートラルに関する県の現状や取組みを紹介するとともに、カードゲームやグループ協議（授業づくり）を通じて、参加者が主体的に環境課題を探究する機会を提供した。

受講者アンケートの結果からは、参加者の平均満足度が3.9（4段階評価）と非常に高く、全員が「満足」「おおむね満足」と回答した。特に、研修内容の理解度や実践への活用可能性について「そう思う」「ややそう思う」と受講者全員が肯定的に評価していた。

研修での気づきを問う質問では、「福井県の取組みを具体的な数値や動画で示してもらい、理解が深まった」「カードゲームを通して、緩和策だけでなく適応策の重要性にも気づいた」「他校の先生方の実践を聞くことで、自校の授業改善に生かせると感じた」など、研修内容が参加者の思考を深め、実践への意欲を高めたことが明らかとなった。

しかし、参加者がなかなか集まらず、研修の案内（図2）のホームページ掲載や、個別の声かけなどを行った。（参加者は16名）環境教育というテーマが教科横断的であるがゆえに、対象となる教科が曖昧であり、「誰が参加すべきか」が明確でなかったために参加者数が伸び悩んだのではないかと考える。

結果として、研修の内容や質に対する評価は高かったものの、カーボンニュートラルについてより多くの教員に知ってもらうための手立てについては課題が残った。



図2 研修の案内



図3 研修の様子

(2) 研修講座「Art×探究」

本講座は、今年度の研修体系の再編に伴い、中学校美術科、中学校音楽科、高校芸術科を「探究」という視点で一本化して実施したものである。

アンケート結果からは、参加者の満足度が3.9と非常に高く、「満足」「おおむね満足」と回答した教員が全体を占めた。特に、参加者25名のうち、研修内容の理解度や実践への活用可能性について「そう思う」（23名）「ややそう思う」（2名）と受講者の全員が研修を肯定的に評価していた。そして受講者のうち22名が受講の理由を「自己研鑽のため」としており、主体的・意欲的に研修を受講していた。

研修設計においては、講師の専門性を最大限に生かすため、担当者が事前に講師の発信内容や過去の講演を事前に精査し、講師の理念や価値観を把握したうえで講座の方向性を共有した。その結果、研修での気づきを問う質問では、「作品の完成ではなく過程こそが学び」「伴走者ではなく“面白い人”でありたい」といった記述があり、教師の関わり方を見直す契機となっていたことが確認された。

(3) 研修講座「ICT活用」

本研修はまず、研修ニーズの高さが顕著であった（受講者53名）。満足度も3.8と高く、研修での気づきを問う質問では、多くの教員が生成AIについて、「業務改善につながる」「授業づくりの負担が軽減され

る」と記入していた。また初心者の受講者は「何から始めればよいか分からない」「正しい使い方を知りたい」という強い関心を抱いていた。特に、校務・授業・進路指導・特別支援など、多様な場面での実践例が紹介されたことは、受講者の不安を軽減し、活用意欲を高める効果があった。

この研修では、研修設計にあたり、講師の理念や発信内容を深く理解することを重視した。過去の講演動画を視聴し、講師がどのような価値観をもって AI 活用を語っているのか、教育に対してどのような姿勢を示しているのかを検討した。そのうえで、「すべてお任せ」ではなく、講師に話してほしい内容や演習の時間配分など、こちらの要望を明確に伝え、研修の方向性を共有した。こうした事前調整により、受講者にとって必要性の高い内容を選択することができた。また、今回は参加者の生成 AI スキルが把握できなかったため、担当者は幅広い層のニーズに合う研修構成を意識した。初心者でも参加しやすく、経験者にとっても学びがあるように、講義と演習のバランスを工夫した点が特徴である。今後研修を設計するにあたり、より効果的な学びを提供するために、受講者のレベルを事前に把握し、ある程度受講者のレベルをそろえた上で研修を設計することも重要であると考えている。生成 AI に関する参加者の経験値の差は非常に大きい。初心者には専門用語が難しく、経験者には物足りないという構造が生まれやすい。今回の研修では、講師が質問フォームを用いてリアルタイムに疑問に答える形式をとったことで、理解の個人差を補うことができたが、今後は「初心者向け」「実践者向け」など、レベル別の研修設計が必要であると考えられる。

さらに、学校全体での活用促進の必要性を強く感じている。研修では「AI は副操縦士であり、最終判断は人間が行う」という講師の言葉が多く受講者に響いていたが、これは生成 AI を安全に活用するための重要な視点である。また、研修後のフォローアップの重要性も感じている。研修後には、生成 AI を活用して参加者の感想を自動整理し、メールで共有した。これにより、受講者同士が互いの学びを振り返る機会をつくることができた。加えて、研修の録画を YouTube（限定公開）で共有し、当日参加できなかった教員や復習したい受講者が学びを継続できるようにした。昨年度は別の研修でリアルタイムオンラインのフォローアップを行ったが、学期中ということもあり、参加者が少なかった。こうした動画でのフォローアップのやり方は、研修を単発で終わらせず、受講者の負担にならない方法だと考えられる。

3 動画の作成

昨年度、都合により希望していた研修を受講できなかった教員から、「録画して見せていただくことはできませんか」との問い合わせがあった。また研修の主担当からも、「良い研修で講師の許可が下りているので、ぜひオンデマンド化してたくさんの教員に見てもらいたい」という要望も出ていた。こうした声を受け、本研究所としても、優れた研修を一部の参加者だけで終わらせるのではなく、さらに学びを広げていく新しい研修提供の形をつくる必要性を強く感じた。

そこで今年度は、講師の許諾が得られた研修を中心に選定し、年度末までの限定公開によるオンデマンド型の通信研修として再構築した。オンラインで行った研修は音、映像ともに視聴しやすかったが、対面形式のものは映像中のスライドが見づらかったり、受講者が映り込んだりしたため、作成が困難であった。

Plant の受講者の振り返りでも、映像の見やすさ、音声の聞きやすさについて質問したところ、対面形式の研修はオンラインの研修に比べ評価が低かった。また研修のスライドに教科書が使われていたり、研修中に YouTube を流したりするなど著作権に関する課題があった。来年度の講師との調整までに、著作権法第 35 条や授業目的公衆送信補償金制度、SARTRAS（授業目的公衆送信補償金等管理協会）などを参考に、オンデマンド化の方法について検討する必要がある。

今回の録画配信が視聴者数は少なかったが、これは公開が 12 月～2 月になってしまったこと、告知がうまくいかなかったことが原因であると考えられる。受講者からは、「道徳的価値に迫るためのアプローチへの考え方が大変参考になった。もっと話したい、楽しいと感じられる道徳の授業が作れるように、授業の作り方を研鑽していきたい。」「社会科で児童にどのような力をつけるといいのか、評価の仕方から具体的に学ぶことができた。また、生成 AI の評価での使い方がとても参考になり、ぜひ活用していこうと思う。今、社会

科で求められている授業の在り方もいろいろな視点から学ぶことができ、今後の社会科の授業を考えるうえでも、とても参考になった。」など前向きな振り返りがあった。来年度は引き続き今年度と同様にオンデマンド化を行い、告知を工夫していきたい。今年度の告知は、ホームページの「お知らせ」の欄で配信を告知しただけだったが、来年度は、Plantの掲示板を使う、悉皆研修で紹介スライドを掲示する、各機関に通知文を出すなど告知の仕方を工夫していきたい。

Ⅲ 今後の取組み

今年度の専門性向上研修の参加者は延べ2506人であった。これは福井県の教員数の約32.3%である。

今年度の受講者の振り返りを分析すると、「体験的・参加型の学び」を重視する傾向が明確であった。講義を聞くだけではなく、自ら活動したり、教材を扱ったり、他者と協働したりする中で理解が深まったという声が多く、体験を通じた学びが研修の満足度を高めていることがうかがえた。また、「他者との対話や交流」を通して新たな視点を得たいという意識が強かった。校種や教科を越えた対話の中で、自分にはなかった視点に気づいたり、授業改善のヒントを得たりしたという記述が多く、協働的な学びが研修の価値を高めていた。

以上の結果をふまえ、残りの約67.7%の教員に働きかけ、研修を受講してもらえるよう、来年度は以下の3点について新たに組み込んでいく。

1 広報活動

これまで本研究所では、研修案内をホームページに掲載する、悉皆研修で紹介する、ちらしを作成し訪問型研修で配布するなど様々な工夫をしてきた。しかし、教員が本研究所のホームページを閲覧することは頻繁ではなく、研究所が発信する情報が十分に届かないという課題がある。研修の質を高めても、そもそも教員の目に触れなければ参加者の増加につながらない。

そこで来年度からは、校内で自然と目に入るポスター(図4)を作成することとした。教員が視界に入る職員室に情報を届けることで、教員の目に留まり、研修を受講してみようという気持ちになる効果が見込まれる。

さらに、研修が始まるまでの待機時間や休憩時間用、研修を紹介するスライド動画を制作する。これは本年度の嶺南教育事務所主催の研修において本研究所主催の研修「ICTの活用」の紹介スライド流してもらった直後に申込数が増えたことから、効果が期待できる(図5)。

この広報手段の見直しは、教員の働き方の実態を踏まえたうえで、研修機会をより確実に届けるための取組みである。



図4 専門性向上研修一覧

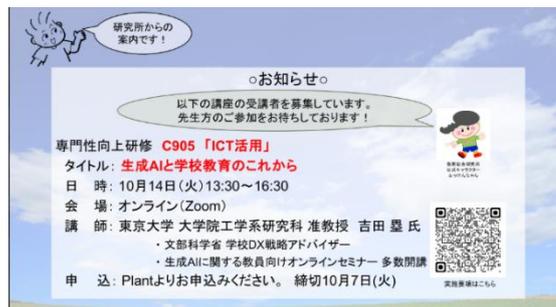


図5 ICT活用のスライド

2 学習全般における新たな取組み

(1) 所外の取組み

専門研修課では来年度、図6の研修講座において所外での開催を企画している。これは、教員が日常から一步離れ、環境を変えて学ぶことで、参加意欲が生まれることを目的としている。場所を変えることで生まれる「余白」や「気づき」は、学校内では得がたい学びをもたらす。「歴史×科学」では、朝倉氏遺跡博物館でホンモノに触れるというテーマで、本物の土器や埋蔵品に触れる研修を行う予定である。また「ものづくり」では、商業・工業の教員、芸術科の教員の参加を期待している。場所をサンドーム福井のワークルームとしたことで、ものづくりに特化した雰囲気の中で研修ができる。

研修講座	開催場所
ものづくり	サンドーム福井
歴史×科学	朝倉氏遺跡博物館
環境	エコプラザさばえ
小図・中美	金津創作の森

図6 所外研修一覧

来年度の研修では、こうした環境変化の効果を最大限に生かしながら、教員が自らの実践を見つめ直し、新たな学びを持ち帰ることができるよう検討を進める。

(2) 子ども講座の並行開催

来年度、「歴史×科学」は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターと、「環境」は福井県環境政策課と共同開催する。なお、この2つの研修は、それぞれの共催機関が運営開催する子ども向け講座と並行開催する。教員自身の子どもが講座に参加して得た気づきは、学校現場での児童生徒理解にもつながる可能性がある。教員が学びと我が子を同時に大切にできる機会を提供することで参加者を増やしたい。

(3) 福井大学教育学部附属義務学校との連携

「教員研修学校」である福井大学教育学部附属義務学校では、子どもとともに学ぶという理念のもと、年間3回（6月・10月・1月）公開授業研究会が実施されており、これまでも多くの教員が参加してきた。来年度からは、教員が様々な視座の中で授業改善に取り組めるよう、この公開授業研究会を「専門性向上研修」の一部として位置づける。分科会での学びを必須とし、公開授業の参観だけでなく、分科会での協議を通して授業づくりの視点を深めることを重視する。

3 他機関との連携

今年度より、本研究所は嶺南教育事務所と連携をより強化し、県内全域の教員研修を推進する体制を整えた。まず、研修運営の準備として、両機関で実施要項の様式を共有し、研修情報を見やすく統一した。さらに、研修内容の質的向上を図るため、嶺南教育事務所主催の研修には本研究所の所員が副担当として参加した。これにより、研修内容の相談や次年度講師の選定などを両機関で協議できるようになった。

来年度から幼児教育センターと特別支援教育センターと連携し、2つのセンターのいくつかの講座を「専門性向上研修」と位置付けることとした。より多くの教員に、それぞれの機関が実施している研修を一元的に示し、知ってもらうことで、個に応じた学びの機会を広げることができると期待する。

また、来年度から新たに岐阜県教育委員会事務局と連携し、オンラインで行う講座2つを相互乗り入れの形で受講できるようにする。福井県と岐阜県の教員の研修受講参加機会を増やすだけでなく、両県の教員が交流し、新たな気づきや学び直しの機会を期待する。

さまざまな機関と連携することで、教職員にとっては選択の幅が広がり、個の強みを生かし学びたいこと広め深めることができる。また、研修主催者にとっても、連携することで新たなアイデアが生まれ、互いの研修に関わることでよい刺激にもなることが期待される。連携するにあたっては、何度も打合せを行い、曖昧な部分を残さず細かな部分まで確認しながら進めることが重要である。本年度の反省としては、どこまで

がこちらの業務なのかが曖昧なまま進めた部分があった。また、総括として、各機関の間に入った連絡調整が重要となる。今年度の反省を生かしながら、来年度の連携にも積極的に取り組んでいく。